



# YES 通信



〒819-1116 糸島市前原中央2-2-22波多江ビル2F 電話 321-4119 2020年11月号

## 子どもは未来からの留学生（最先端の教育）

9月のYES通信で福岡雙葉中学校・高校のICT教育が素晴らしいことを報告させていただきましたが、今回はその続編です。実際に授業の様子を見学できるということで、再度、福岡雙葉中学校・高校の勉強会に参加しました。会場に入ると福岡県内から300名以上の学校の先生や塾関係の方がお見えになっていました。みなさんのICT教育への関心の高さが感じられます。雙葉の谷本校長は今回の企画が「福岡県内のICT教育の底上げにつながる」という熱い思いで企画なさったそうです。

そのためにも多くの先生方が、入念な準備をなさっていたのがとても印象的でした。ICTを活用した授業が高2現代文、高2数学Ⅲ、高2世界史、高1英語、中3音楽、中2英語、中1理科、中1美術の中から選択で見学できるというものでした。私は国語を選択して見学することにしました。

実際に子供たちの様子を見た感想は、子供たちがとても楽しそうでした。また、主体的に取り組んでいたのが印象的でした。ワークシヨップ形式でグループで話し合っ、話し合ったことをもとに自分の考えをまとめていくような授業でした。

ICTをどのように活用しているかという点、本文中の重要なキーワードは何か？というディスカッションをする際に、今迄だと付箋にキーワードを書

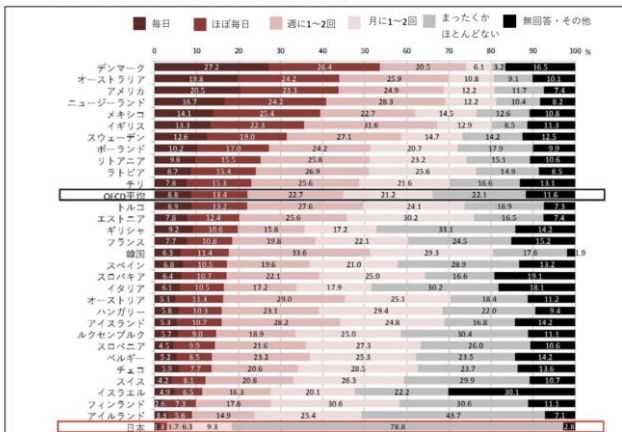
き込みそれをグループで共有するのですが、それをネットワーク上で実施するのでとても簡単です。全体共有はさらに効率的で、以前なら全体で共有するために模造紙にグループごとに書き写して壁に貼るという作業が出てきますが、ICTを活用することで簡単に情報が共有できるのでかなり効率的だと感じました。先生だけが話している授業から、生徒が一生懸命に考えて積極的にアウトプットする授業になっていました。逆に、居眠りや内職という私の得意技はとてもできる状況ではありません。

講演では2005年から生徒全員にiPadを配布したICT最先端の高校である近畿大学付属高校の乾氏からの話がありました。

その中で一番印象に残ったことは、日本のICT教育は下の図にあるように調査した国の中で、ICTの活用では最下位のレベルなのだそうです。正直、そんなに高いとは思っていませんでしたが最下位とは驚きでした。日本の授業は教科書に書いてあることを覚え理解することに重点が置かれ、その自分自身で主体的に検索して調べたりする必要性を感じない授業になっていることが想像できます。

そして次に将来の学校作りの理想は、①「学校じゃないと出来ないこと」②「みんながないとやれないこと」をどれだけ作れるかにかかっているとの

図45 (9) コンピュータを使って宿題をする



ことでした。知識を習得することはICTを活用すれば自宅で出来ることがコロナ禍でわかってしまったと仰っていました。近大付属は1学年1000名のマンモス校ですが、その内3名がコロナ後に前のYES通信で紹介したN高校に転校したそうです。ただ知識を習得するだけなら通信制高校や、月額9800円の映像教材で勉強して高卒認定試験を受験することで十分満たされてしまう時代になってきたことでした。今年度はコロナ禍で必要に迫られICT化が進んだ1年でしたが、これからはICT化の質を問われる時代になっていきそうです。最後に乾先生は、「子供は未来からの留学生」と仰っていてとても共感しました。同じ気持ちで子供たちと接して可能性を広げていきたいです。

# やる気相談室

## 漢字

### 漢字コンテストの子供たちの作品に癒されました！

今年は初めて漢字検定協会が主催する「今、あなたに贈りたい漢字コンテスト」に参加させていただきました。

このコンテストは、ある対象者に漢字一文を贈り、その思いを作文にするという企画です。小学生、中学生、高校生、大

学生のトレーニングをしているところで、なので毎年実施されるこの企画に参加してみようと思った次第です。

しかし、実際に参加してみると小学生には非常にハードルは高く、そんなにスラスラ書ける訳ではありません。しかしみんな頑張っている練習してくれました。毎年この企画は実施されるので、「反復は力である」を信じて、来年はさらに良いものが書けるようになると思っています。

絆や兄弟の絆を深めるきっかけ作りになり、ひいては自己肯定感の向上にもつながるのではないかと感じた次第です。

私も57年間生きてきましたが、自分と向き合うきっかけはなかなかありませんでした。仕事では手紙を書くことはあってもなかなか両親に書くことはありませんでした。独立してどん底の時にたった1回だけ両親に手紙を書きました。その手紙を母は大事にとっている後から聞きました。

参加してみての感想はというと、最初はアウトプットする経験を少ししてもらいたいとの思いだったのですが、作文の内容を読んでみて、子供たちのお父様お母様に対する純粋な気持ちや「兄弟に対する尊敬やいたわりの気持ち、飼っている動物や虫、使っている消しゴムに対しての素直な気持ちを読ませていただき、自分の気持ちを紙に書くことの大切さを痛感しました。

講師達とも作品を共有したのですが、講師の中には「このような作品を子供からもらったかった。」という声もあって、家族の

近々、生徒たちの作品をデータにしてみなさまにもシェアさせていただきますので、ご覧いただけますと幸いです。

講師の話聞いて昔のことを思い出して、子供たちの作品が将来の家族の宝物になってくれると嬉しいなあと思っています。

生徒の作品を語彙力診断テストの結果と一緒に面談して保護者様にお渡ししているのですが、保護者様からも「大切に取っておきます。」「嬉しいです。」「こんなこと考えていたんですね」等、私達を勇気づけてくれる声掛けをいただき嬉しい限りです。

学生・一般という4つの部門があり、全国から集めた作品の中から最優秀賞などを決め、最高は5万円相当の商品まで買えるのです。ちなみに審査委員長はテレビでもおなじみの読売新聞特別編集委員の橋本五郎氏で審査員にはお笑い芸人のゴルゴ松本氏等が決まっている大々的な企画なのです。



## 書籍紹介 あおざくら 防衛大学校物語 二階堂ヒカル著

今回紹介する本はスポーツでもないのに「今最も熱いスポ根マンガ」とも言われている本です。3年前に私の母校である防衛大学校にはじめて生徒が進学したのですが、今年の中3で防衛大学校に行きたいという生徒が現れたのです。防衛大学校の学生生活は本当に厳しく私が在学中の頃から、入学時500名だった生徒が卒業時には400名になるという大学なのです。そのほとんどは1学年の時に辞めてしまうのです。私は自衛隊のことも防衛大学校のこともあまり知らないまま入学したので、大きなギャップを感じたので、出来るだけ現実を伝えてあげたいと3年前も私の体験を卒業生に話したのですが、自分の話だけだとどうしても主観が入りすぎるような気がしていました。今回は中学生ということでもどこまで話が通じるのか？不安もあったのですが、なんと素晴らしい味方を発見したのです。この漫画は近藤勇という普通の高校生が防衛大学校に入学して成長していく様をマンガにしたものなのです。しかも、かなり実際に近いので読んでいて懐かしさを感じました。18巻でまだ2年生の夏なのでこれからが更に楽しみです。「友情・努力・勝利」を通じて組織運営を学べるマンガに仕上がっています。最近スポ根マンガに飢えている方には特にお勧めです！